



榮谷温子： アラビア語における限定と非限定の意味と機能

1. 執筆目的と研究手法

本博士学位請求論文は、アラビア語（文語及び4方言）における「限定」と「非限定」の意味と機能を考究することを目的としている。

「限定」と「非限定」は実際に着手すると容易な対象ではなく、執筆者がカイロ・アメリカン大学への修士論文 (A contrastive analysis between Arabic and Japanese in definiteness and predictions based on the Markedness Theory, Feb. 1995) で成し遂げられなかった局面を研究し続けようとする意図は評価でき、本論文でも上記の目的が完全に達成されたとは云わぬまでも、かなりの程度まで進捗した結果が得られたと判定される。

研究手法として執筆者は、①できるだけ種類の異なるテキスト（童話、昔噺、漫画、小説、戯曲、新聞のニュース記事、雑誌のインタビュー、民俗誌など）を取り上げる、②正則語の他、修士論文では対象としなかった口語アラビア語（エジプト、モロッコ、マルタ、ウズベキスタン方言）も加えて、対照的に分析する、③限定・非限定の枠組みを「情報構造」と考え、あるメッセージ伝達のためにこの枠組みの果たす役割について、広いテキスト文脈を視野に入れた分析を行う、の3点を意図した。

2. 学位請求者の学力及び研究活動

1) 榮谷温子氏は当大学およびカイロ・アメリカン大学で主として正則アラビア語（古典アラビア語）学を専攻し、これら二つの大学大学院の修士の学位を有するので、正則アラビア語の学力は非常に高い。4年強のカイロ留学の故、エジプト方言（特にカイロ方言）の運用も十分良好と考えられる。又、長期の学習の結果、マルタ語に関する学力もかなり持っていると判定できる。

2) 同氏は、これまでの3年間で、審判制のある学会誌・学術誌に4つの論文・研究ノートの掲載を許され、且つ日本の代表的な学会である日本言語学会及び日本中東学会で3つの口頭発表を行っている。従って、研究を公表する活動に関して全く問題にする点はない。

3. 学位請求論文の内容

当論文では、

①限定・非限定という情報構造の特質について、従来指摘されてきた、話し手・書き手が聞き手・読み手の立場を考慮するという消極的側面だけでなく、話し手・書き手自身の意図や心理を反映させるという、主体的な要因も大きく関与していることが、インフォーマントへの面接調査および多様なテキストの分析の結果、明らかにされている。

②またコーランの物語テキスト分析等により、名詞句の限定の度合いが、語りの際の視点のマーカールとして機能していることも論証された。

③さらにテキストの種類・目的などの違いも名詞句の定性に反映されることを、豊富な具体例をもとに示している。例えば、物語などでは主題に深い関わりのある人物を限定形で導入するテクニックがよく用いられるが、話し言葉では、テキストの受け手に過重な負担を求めるようなテクニックは用いられにくい。そこで主題に深く関わる人物を、非限定形で導入しつつトピックとして提示し、文やテキスト全体のレベルで、トピック-コメント構造を限定・非限定の構造のかわりとして機能させていることなどである。

④最後に、限定・非限定に関する文語および各方言の特徴さらにその対照結果もまとめられている。

限定・非限定の問題は、決して容易に解決できる研究対象ではなく、アラビア語はもとより他のセム語（例えばヘブライ語）研究でも稀と云える。本論文は、文語・口語アラビア語の対照研究、アラビア語比較方言学の進歩に貢献すると共に、一般言語学にも十分役立つ情報を含んでいると認定できる。

4. 学位請求者（榮谷）による執筆後の自己の課題

- ①自らのフィールド調査で得たさらに多くの生のテキストの分析。
- ②他のセム語、印欧語、チュルク語とアラビア語との言語接触の要素の考究。
- ③名詞句全体（ここで扱わなかった他の種の限定名詞句及び所有表現など）に考察を拡げること。
- ④他の文法事項（例えば態や時制・相）と限定・非限定との関連の解明。

5. コメント

- ①時間（テンス・アスペクトなど）及び空間（臨場的指示性）と限定・非限定との関係の考察が欠けている。
- ②前項と部分的に重複するが、限定・非限定とその他の文法範疇との関連の考察が、断片的・表面的である。
- ③クラムスキーの引用部分に不正確な部分が見られる。クラムスキー本人の誤りならば、そのむね注記が必要である。
- ④アラビア語方言に関して、論文の本筋と関係のない些末な記述が多い。
- ⑤方言を何種類も扱うより、正則語とどれか一つの方言を対象を絞った方が、まとまりのある論文になったのではないか。
- ⑥インフォーマントに関する情報（生育過程など）が盛られていない。
- ⑦論文にふさわしくない、くだけたスタイルの文が混じっている。

以上の指摘は今後の研究に十分に留意すべきことではあるが、当論文の本質、最終判定に直接に関連するものとは判定されなかった。

6. 判定

以上により、当論文は課程博士号請求に必要な水準を十分超えており、また最終試験の結果、榮谷温子氏は研究者として出発できる適性を十分備えていると認定し、審査員全員が、博士号を授与するにふさわしいものと判定した。